

時

タクラスの手伝いに入ることがある。その日は たまたま中学年の図工で、物語の絵を描いていた。ぼくの役目は指導ではなく、身も蓋もない言い方をすれば監視、である。みんなやるべきことをやっていたら早々に抜け出して、通常業務に戻ろうと目論んでいたが、一人の男の子が、机から離れて出歩いている。身を持って余して廊下に仰向けになり、匍匐前進のような格好をしている。ふん、どうやらお役目があるらしい。

「どうした?。」

「絵の具忘れました。」

寝たまま答えるな、と怒鳴つてもよかつたが、それは後回しにして、その子の机の上と表情を交互に見、どうしたものかと考えた。たぶん忘れたというのには取り繕つたに過ぎない。

学習道具がそろわぬ子は、たいていどんな時間も何かを欠いている。叱つて直るようなら背中や雑巾がけをするような態度はとらない。欠くことから抜け出せない苛立ちをどこかにつけていないと自分を保てぬのだろう。できるものなら絵を描きたいが、絵の具を用意できなかったのは他ならぬ自分である。誰を責めるわけにもいかない。このままほつといてイライラが高じれば、誰かを引きずり込まずにはいられなくなる

う。そしてまたトラブル発生。

借りる絵の具もないとなれば、と思い巡らしていたら、色画用紙のサンプルがあつたのを思い出した。担任に聞くとちぎり絵になつても構わないという。

「これを君にやるう。切つて貼つたらどうだ。ほかの誰もやっていない絵ができるぞ。」

興味を持つたらしい。喜々として作り始めた。これで無用なトラブルを回避できた。後で見に行つたら、色とりどりの葉を付けた大木が作品の真真中に鎮座していた。これなら引けを取らないだろう。

その日、帰宅すると絵が届いていた。本物を飾りたいけど、購入や収集する気はまったくないぼくのような人間には、レンタルというありがたいシステムがある。音楽も映画もサブスクリプション全盛だが、絵画の世界にもあることを最近になって知つた。

作品に寄せた作者の言葉によれば、世間的な成功を目指して行き詰まり、しばらく描けない時期があつたが、豪雨災害によつて近親者を亡くし、鎮魂の思いで描いた、とある。ただカタログで見えて選んだ抽象画だ。そのエピソードは届いてから知つたに過ぎない。

描こうにも描けない煩悶を経た二枚の絵に出会う日。秋なんだろうな、やつぱり。こういう巡り合わせというのは。



専業ババ奮闘記(その2) 30

木幡智恵美

産前休暇(2)

大きなお腹を抱えた娘が、寛大と実歩を連れて武道館に見学に来たのは、産休に入つて間もなくのことだつた。寛大と実歩が「ババが合気道するの、見たい」と前から言つていたらしい。産休に入り、時間にゆとりができたから、やつと来る気になつたようだ。

道着をつけ、稽古が始まる前に準備体操をしていると、防寒着でさらに太くなつた娘が、やはり着膨れた寛大と実歩と手をつないで道場に現れた。先生のそばにやつてきて、「お久しぶりです」娘が声を掛ける。「おお、三十年ぶりくらいかな」と先生。

「お母さん、合気道教えて。男の子に負けたくない」と、不謹慎な理由で娘が言い出したのは小学校三年生の時だ。就職して三年目くらいだつたか、武道館で島根大学の合気道同好会が稽古をしているというので、幾度か稽古に参加したことがある。流派が違い、稽古しづらいこともあり、転動を機に脚が遠のいてしまった。他の武道と同様、合気道にもいろいろな流派が派生している。私が学生時代に属していた部は本部道場系で、春合宿は毎年東京の本部道場で行つていた。娘と一緒に武道館に偵察に行つてみたところ、数人で稽古しているグループが、学生時代に行っていたのと同様の稽古をしている。指導者らしい人に話を聞くと、本部道場で稽古をしてきたとのこと。早速参加を申し込み、娘と一緒に週一回稽古に行くことになつた。

娘は結局一年続けたのだろうか。四年生になつてバレー部に入り、疲れて帰るようになると、合気道の稽古までは難しくなつた。その後は、小学生になつた長男と一緒に稽古に通い、中学校に入つて卓球部に入るとやはり付いてこなくなつた。長男に付いて途中から加わつた二男と二人で通つたが、これも部活に入つてから辞め、その後は一人で通い、長女に誘われ通い始めてから三十年経っている。

翌日娘から電話があり、寛大も実歩も、保育所の先生に、合気道を見に行つた話をしたそう。でも、寛大は、「大きくなつたら合気道する」とは言わず、隣でやつていた武道に惹かれたのか、「大きくなつたら剣道をやる」と、言つたとのこと。

30代フリーター やあ、ジイさん。米大統領選でのバイデンの最大の勝因は、やはりトランプの新型コロナ対策の失敗か。

年金生活者 というよりも、この災厄が起きたこと自体の責任をトランプは取られたと言ったほうがいい。アメリカ国民は大昔の「王殺し」を実行した。

吉本隆明は「西欧的な〈王〉の概念では、〈王〉は人民により担ぎ上げられる存在であるとともに、ひき降される存在でもある」とし、「凶事が続発すれば、それは〈王〉に神をなだめるだけの〈威力〉がないためであり、〈王〉の存在が不吉であるためである」とされて、殺害されてしまう」と書いている（「天皇および天皇制について」）。

トランプはコロナという「凶事」のゆえに、「存在が不吉」と過半の国民にみなされ、退場を求められたと考えることができる。近代の物差しでは「凶事」の発生そのものには責任がな

いった、社会全体の中では少数者に属する勢力によってなされてきた。少数であるがゆえに、その争いでは暴力が最も有効な手段でありえた。

この一部の少数者による権力争いを全員による権力争いにかえたのが民主制だ。従前に比べて争う相手があまりにも多いので、暴力で相手を抑えつけないようにとすると、負担と犠牲が大きすぎると。そのため、暴力の代わりに採られるようになった闘争手段が投票だ。民主制は暴力の代替として機能しており、その機能が不具合を起こすと、たちまち暴力が顔を出す危険が生じる。

民主制がそうした不安定性を免れない最大の理由は代表制にある。代表と国民との間には大なり小なり必ず乖離が生まれる。それを避けたければ、民主制に代わる制度を求めざるを得ない。

30代 そんな制度をつくれるのか。
年金 考えられるのは「輪番制」だ。国民が持ち回りで行政を担う。レーニンは「社会主義のもとでは、すべての人が順番に統治するであろう。そし

いにもかかわらずだ。

30代 アメリカに「大昔」はないぞ。年金 トランプは自らが王として殺害される可能性を察知していたのかもしれない。だからこそ、「凶事」をできるだけ小さく見せようと楽観論を繰り返し、責任を中国に転嫁することに躍りになった。

封じ込めようとすれば経済が停滞し、経済を動かそうとすれば感染が広がるコロナ危機は、どっちの対策に重点を置いて、トータル被害、すなわち感染による直接被害と経済停滞による間接被害を合わせた被害は大きなものになる。だとしたら、「凶事」を大きく見せることになりかねない封じ込めをトランプが嫌ったのもうなずける。

30代 コロナがなかったら、彼は落選しなかったということか。
年金 恐らく。核をめぐる米朝の緊張を和らげ、人権抑圧を続ける中国への圧力を強化し、就任3年で雇用を700万人増やし、失業率3・5%という

て、だれも統治しない、ということにすみやかに慣れるであろう」と書いている（『国家と革命』宇高基輔訳）。輪番制は今の国家にもないが、社会の諸組織にはいくらかでもある。町内会のゴミ当番を吉本隆明は理想の国家のあり方のモデルと考えた。

私の住むマンションの管理組合の理事も輪番制だ。そうしないと理事のな

50年ぶりの低水準を達成した彼の功績は、多くのアメリカ国民に評価されていたはずだ。

彼は自らが「この国の忘れられた人々」と呼ぶ国民に「次はあなた方がエスタブリッシュメントに代わって特別扱いされる番だ」という趣旨のメッセージを送り続けた。その最大の対象が、鉄鋼や自動車など衰退産業の立地するラストベルトの白人労働者たちだった。人は自分が特別扱いされたと感じる時、その相手に返礼せずにはいられない。彼らは大統領選でトランプ陣営のエンジンとなった。コロナはそのエンジンにブレーキをかけた。

30代 開票所の前ではトランプ、バイデン両派がにらみ合い、今にもなぐり合いを始めそうな緊張状態が続き、民主主義の危機が指摘された。
年金 民主制はその表皮の裏に暴力を隠した不安定な制度であることがあらわになった。

国家が誕生して以来、その権力を握るための争いは、豪族、貴族、武士と

り手がない。理事になっても、それによって手にできる権力は、強いられる負担にくらべてはるかに小さい。理事になることはいわばマイナスの権力を背負わされることを意味する。権力争いが生まれる余地はない。

争いが始まるのは、権力によって富を手に行き渡すことができるからだ。つまり富を手に行き渡すことができないのは権力がないからということになる。理由は富の稀少性にある。富があり余るほどあれば、権力争いは不要となる。

その状態に近いのがマンションだ。そこに居住することによって受ける全サービスはマンションの富のすべてと考えれば、その富は住人全員に等しく行き渡り、だれかが手にしそこねることではない。国家の制度に輪番制が導入されるときがあるとすれば、社会の富の稀少性が消滅したときだ。資本主義の高度化とテクノロジの発達が加速する富の稀少性の縮減は、輪番制について語ることが必ずしも荒唐無稽なことではないことを裏づけている。

ニュース日記 762
中村 礼治

民主主義の以前と以後